

第4部 同窓生からの寄稿文

記念誌発刊に寄せて



同窓会関西支部長

国吉兼三

8期 農家政工学部林学科

琉球大学同窓会創立60周年記念誌の発刊、誠にめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。誇り高き学府「琉球大学」で生まれた「琉球大学同窓会」は、今や7万5千余の会員を擁する巨大組織に成長を遂げており、誠に誇らしく嬉しい限りでございます。

60年という長期に亘り、幾多の難を乗り越えて巨大組織の運営に力を注いでこられた歴代の会長・副会長・事務局長・役員、また、それを支えてこられた多くの先輩の方々に深甚なる敬意と謝意を申し上げます。

この機会に、琉球大学での学生時代と卒業後について、振り返ってみたいと思います。

1. 学生時代

1年次が始まると、受講教科の選択と単位登録に目を回しました。教育学部のK教授（父の親友）と同郷の二人の先輩に相談しながら何とか単位登録を終えました。息つく間もなく受講教科の教室探しに右往左往したことが懐かしく思い出されます。

新しい多くの人との出会いがあり、また、多くの仲間や親友もできて、そろそろ大学生活にも慣れて楽しくなってきた頃に1年次は終わってしまいました。

(1) 住込み家庭教師のアルバイト

2年次になったとき、K教授から、近所の親から頼まれているので「どこでも構わないから

高校に合格できるように勉強を見てやってほしい」と頼まれ、中学3年生（M君）の「住込み家庭教師」を引き受けました。家賃も要らず3食付きで報酬も頂けるという好条件に恵まれましたが、「高校に合格させてほしい」という重大責任も抱えてしまいました。

早速、同じ部屋に二人で宿泊しての勉強が始まりました。勉強嫌いなM君でしたが、素直で温厚な優しい性格の子で、私の指示には素直に従い勉強に取り組んでくれました。

1年間の苦勞が実り、M君は無事「S私立高校」に合格しました。本人は勿論、ご両親にも満面の笑顔で喜んでいただきました。合格の朗報に大変喜んでくださったK教授の笑顔も忘れることはできません。

(2) 寮生活と琉大構内夜警のアルバイト

3年次になったとき学生寮に入りました。同時に琉大構内建物の夜警のアルバイトも許可され、私の寮生活と夜警のアルバイト生活が始まりました。

寮の部屋は6人部屋で、金属製の机と椅子の6脚と木製の2段式ベッドが3台、金属製の小型ロッカー6台を備えただけの狭い部屋でしたが、門限も無く24時間出入りは自由でしたので、私にとっては住み心地の良い楽しい生活空間となりました。

琉大構内の夜警は、2時間交替制でしたが、時間内に3回巡回して事故の有無を確認した後

は、見張りの利く特定の場所で読書や教科の勉強もできるという安全で楽な内容のアルバイトでした。寮生活もアルバイトも卒業まで続けました。

2. 琉大卒業後

(1) 中学校の教師となる

琉大を卒業すると、宮城島の「小・中併設校」宮城中学校に赴任しました。島は、電気・ガスその他のインフラ整備が遅れ、厳しい生活環境にありましたが、島の人々は大人も子供も、とても優しく素直で明るく大らかでした。

3年間の短い期間でしたが、子供たちや島の人々から「人の優しさ・温かさ・おおらかさ・明るさ・正直さ・我慢強さ」等々の多くを学びました。島での3年間の教育が私の教育の原点となっています。

その後、沖縄本島の美里中学校で2年間勤めた後、義理の姉（沖縄県教育委員会指導主事）の伝手により大阪に渡り、堺市立陵西中学校に赴任しました。

(2) 理科教育と教員研修に明け暮れる

間もなくして、堺市教育委員会から「堺市立科学教育研究所の天文研究室研究員」に任命されました。当時は、科学教育盛んなりし時代で、全国の都道府県に科学教育研究所や科学教育センターといった教員の研修施設が急速に進行していた時代でしたので、私にとっては願ったり叶ったりの嬉しい出来事でした。

間もなく「天文研究室の主任研究員」と同時に「堺市教育委員会指導主事」に任命されました。私は、小・中・高校教科書の天文分野の単元を主とした「教材研究」と「教員研修講座」を担当する他、各学校からの要請に応じて「学年の天文教材研究会の講師」や「研究授業の講評」等に明け暮れました。多忙を極める毎日でしたが、やり甲斐のある仕事内容に毎日が充実

していたことが懐かしく蘇ってきます。

その後、「堺市立科学教育研究所の所長」となり、平成12年3月に定年で退職しました。退職後は、「財団法人堺市科学教育振興会」の事務局長（兼）常務理事の3年間を経て、現在、「沖縄県大阪学生寮の寮監」を務めています。

3. 琉大同窓会関西支部

私が琉大同窓会関西支部に入会したのは、成田義光2代目支部長の頃でした。総会に参加して初めて活気に満ちた多くの会員の存在を知り驚きました。

私が関西支部の会員になってから深く印象に残る出来事が二つあります。一つは「琉大開学60周年記念行事」の一環として、平成22年3月8日に大阪に於いて「江戸立探検隊・大阪シンポジウム&交流会」が開催されたことです。探検隊の岩政輝男琉大学長、赤嶺健治琉大同窓会長をはじめ、副学長・教職員・学生など総勢45名を大阪にお迎えしての大きな行事となりました。関西支部は会員や友人にも広く呼びかけ多くの参加者を集め、シンポジウムは実りある大きな成果を収めました。

二つ目は、平成22年7月11日に、「ホテル大阪ベイタワー」に於いて「関西支部の創立20周年記念行事」が開催されたことです。

琉大から岩政学長、宮城隼夫副学長、同窓会本部からは赤嶺会長、幸喜徳子副会長、宮城武久事務局長のご臨席を賜りました。大阪からは、沖縄県大阪事務所の我如古所長の他、関西の県人会から「大阪・京都・兵庫・奈良県人会」の代表もお迎えして盛大に行われました。来賓13名、会員44名、合計57名の参加者で大いに盛り上がり大成功裏に終えました。

最後になりましたが、物心両面から温かいご支援を賜っております母校琉大と同窓会本部に深甚なる感謝の意を表します。

心理学へ出会い学者への道を歩む



兵庫教育大学名誉教授

上地安昭

11期 教育学部教育学科

1959年、教師になるために教育学部教育学科へ入学しました。そこで、心理学の講義を受け興味を持ちました。当時、琉大の心理学スタッフには、米国留学から帰国した優秀な先生方が揃っていました。東江康治先生、東江平之先生、小橋川慧先生、名城嗣明先生、赤嶺利男先生といった錚々たるメンバーでした。それに、当時の琉大が沖繩初の心理学者で広島文理大学を卒業された与那嶺松助先生でした。まさに心理学黄金時代ともいえる琉大で心理学に出会えたのは幸運でした。そこで、偉大な恩師の先生方のすすめもあって、広島大学大学院修士課程・博士課程への進学を決意し、博士学位（心理学）を取得することが出来ました。

大学院終了に伴い琉大の恩師から、有難いことに母校琉大への就職をすすめられましたが、広島大学教育学部助手へ採用され講師、助教授まで勤め、その間米国ミシガン大学カウンセリングセンターの客員研究員として2年間留学しました。その後兵庫教育大学教授へ就任し定年退職後に私学の武庫川女子大学へ5年間勤務し、現在「神戸カウンセリング教育研究所」代表として、カウンセリング教育・研究活動に専念しています。

振り返ってみますと、琉大をスタートに心理学（カウンセリング）の学問分野の探究を一筋に、学者・研究者人生をこれまで歩んで来た感があります。この間、主要著書（訳書）を15編

出版し、中には19刷の版を重ね約2万4千冊売れた専門書もあります。同時に、これまで全国43都道府県の教育委員会・センターや大学等からの講師依頼で教育講演・講義を行う機会にも恵まれました。

年を重ねるにつれて故郷沖繩への思いは募るばかりですが、やっと最近、学者として、また日本人としての確かなアイデンティティが持てるようになった感じがします。と言いますのは、本土復帰前の当時の琉大学生時代の私は、沖繩人なのか日本人なのかアイデンティティが曖昧で悩んだことがありました。この点で、私にとっての日本本土での学問への専念は、人間的成長を促進する大きなエネルギー源でもあったのです。まさに、学問の力は偉大だと確信しています。

この意味で、これから琉大で学ぶ後輩諸君には、琉大を基盤にそれぞれの学問へ触れ、沖繩もよし、さらに日本本土および世界を舞台に自己探求のための有意義な人生の旅へ挑んでほしいと切に願います。

九州・山口支部について



前九州・山口支部長

照屋 常 信

13期 文理学部法政学科

琉球大学同窓会創立60周年記念誌の発行、心からお祝い申し上げます。10年前に刊行された「同窓会創立50周年記念誌」を手にした時、同窓会の歴史は戦後沖縄の歴史そのものであると深い感慨に浸ったことが思い出されます。

九州・山口支部の結成

琉球大学は、沖縄の本土復帰に伴い国立大学に移行し、移行後次第に他府県出身の学生も増え、取り分け九州各県から多くの学生が本学で学ぶようになりました。そして多くの卒業生がそれぞれの出身地に戻り就職するなど九州各県で活躍するようになってきました。このような状況から九州にも同窓会支部の結成を望む声が強くなっていったところ、平成14年4月、当時本学の工学部長であった山城康正先生の御尽力により、先生が顧問として親交を重ねていた「琉球大学陸上競技部」のOBを核に、九大教授の新川和夫氏を初代会長に迎えて当支部が結成され支部活動がスタートいたしました。

私は、平成17年10月に2代目の会長に選任され、以来昨年11月までの約10年間、非力ながら支部長として支部活動に関係してまいりました。

当支部の現状

当支部の結成が、前記のとおり陸上部OBを中心になされたので、結成当初は「陸上部OB会」の観を呈していたようですが、時間の経過

とともに、同窓会会報誌や口コミによって支部の存在が認知されるようになり、同窓会への参加者も年々増加し、現在では文字通り「オール琉大同窓生」が参加する支部となっています。

このように支部活動の輪も年々広がりつつありますが、当支部は、参加する同窓生のほとんどが九州・山口県等の本土出身者で、本土復帰後の卒業生であることから年齢構成的にも比較的若く活気があります。また、支部の名称が示すとおり、そのカバーする領域も九州・山口と広域ですが、年一度の支部総会へは遠く鹿児島や宮崎等九州各地から熱心な同窓生が多数参加してくれます。

殊に、数年前からは、大分県在住の同窓生が積極的に多数参加するようになり、お陰で支部総会も年々盛大なものになっています。平成26年度支部総会は、大分県日田市での多数の参加者を得て開催いたしました。会員からは、今後、日田市での総会同様、福岡市を離れた地での総会開催を希望する声も聞かれるようになってきました。

新執行部のスタート

平成27年11月の支部定時総会において、役員改選がなされ次のとおり新役員が選任され、執行部の若返りが図られました。

支部長	松下 博文 (1975入学 教育・小)
副支部長	上間 哲 (1973入学 法文・経営)
事務局長	四郎丸 治 (1989入学 法文・法政)

新執行部の御活躍を期待しています。

教員採用試験対策講座に関わって



同窓会評議員

上江洲 公 志

13期 文理学部英語英文学科

1 厳しい就職状況

先日、久しぶりに首里城を見学した際、龍樋を見ながら学生の頃を思い出した。1965年の琉球大学が首里に在った頃、男子寮は現在の県立芸術大学の敷地にあった。夏場は志喜屋記念図書館での夜間学習を終えて、帰りに街灯のない龍樋の冷たい水で手や顔を洗った。就職試験対策、留学計画、家庭教師のアルバイト等で慌ただしい学生生活だった。あれから50年が経ち、現在の琉球大学がある西原町の広々とした千原キャンパスは、多くの学生が自動車通学をしていて隔世の感を禁じ得ない。

県内の新聞によると、2016年1月29日の文部科学省の調査で「全国44の国立の教員養成大学・学部を2015年3月に卒業した人の同年9月末時点の教員就職率が、前年比0.1ポイント増の60.5%」だった。一方、「琉球大学の教員就職率は52.2%で前年度の52.7%から0.5ポイント減少した。卒業生92人(前年度93人)のうち教員になったのは48人で前年度から1人減だった。」また、「小中高校など公立学校の教員採用試験で、……鹿児島県が最も高く11.9倍。沖縄県は10.2倍」だったと同紙は競争率の高さを報じている。大学卒業者の就職状況は、沖縄県のみならず全国的に厳しいようである。

2 就職試験対策

琉球大学の学部・学科や就職センター等の取り組みに加え、同窓会でも諸活動の一環として、在学生や卒業生の教員志望者を対象に「教員候補者選考試験対策講座」を50周年記念館において平成17年以降毎年実施している。本県教育委員会から選考試験の実施要項が発表される4月上旬に第1次試験対策講座が開始され、7月中旬の試験実施日近くまで毎週水曜日の午後6時から7時30分までの90分間実施されている。夏季休暇に入ると、8月初旬から中旬まで第2次試験対策講座がほぼ毎日同時間に実施される。

講座内容の概要は、選考試験実施内容にできるだけ沿うように、第1次試験対策として、選考の視点、琉球の歴史、小中高校の学習指導要領、教育法規、県教育施策等の開設がある。第2次試験対策として、自己アピール文や教育論文の作成、学習指導案の作成と模擬授業の実施、英語自己紹介文の作成(小学校)、英作文及び英語面接(中・高英語)が、また、総合指導及び個人指導として、教育論文の添削、模擬授業の実践等が開設されている。

同窓会事務局長の山里将順氏によると、受講者は60名前後で、その多くが講座開始前に余裕をもって入室し、開始までの時間に集中的に自学自習し、講座終了後も夜遅くまで居残って勉

強する学生も多いという。熱心に講義を聴いてメモを取り、質疑もよく行なう受講態度から、将来の沖縄県の小中高校における教育に携わりたいという熱意が感じられる。

3 「外国語活動」

本県の教員候補者選考試験に7年前から盛り込まれている試験の一つに、小学校教員希望者対象の第二次試験の個人面接(英語を含む)がある。文部科学省は2013年10月、「外国語活動」として実施している小学校英語の開始時期を現在の小5から小3に前倒しする方針を明らかにした。小学校の3,4年生は週1~2回、5,6年生は週3回の実施を想定し、小5からは教科に格上げし、検定教科書の使用や成績評価も導入することになっている。

英語教育の早期実施については、国民の考え方はまだ完全に定着していない感はあるが、アジア主要国の小学校における英語教育の状況を参考にしたい。河添恵子著「アジア英語教育最前線」(2004年刊)(青山学院英語教育研究センター調査資料など参照)によると、2000年から2004年の間の都市部の教育事情で、国全体の状況ではないとしながら、小学生の英語学習時間数の比較を挙げている。

それによると、タイでは小1開始、20分の週

6~15時間(時限、以下同じ)、年間96~320時間、週3回の年144時間の補習・塾の学習があり、台湾では小1開始、40分の週2時間、年間57時間、毎日1時間の塾の学習がある。中国では小3開始、40分の週7時間、年間160時間、学校補習・検定・エリート教育があり、また、韓国では小3開始、40分の週1時間、年間25時間、週3回のクラブ・塾の学習がある。更に、ベトナムでは小3開始、45分の週1時間、年間48時間、補習・塾の学習がある。一方、日本では小3開始、45分の週1時間、年間11時間、週1回の英会話・塾の学習があるとしている。とりわけ、韓国や中国では学習のレベルも高く、小6段階で日本の高校受験レベルの英語力を要求しているというのは驚きである。

近年注目を浴びているのが“グローバル”(全世界の)と“イングリッシュ”(英語)の結合語としての“グロービッシュ”である。世界に散在する約3000の言語の中には、母国語として話す人の数が減少し、消滅の危機に瀕しているものもある。言語の死滅は大きな文化の損失である。一方、多くの異なる言語の存在は国際規模の意思疎通を困難にしている。そのような状況下で、グロービッシュによる多国間の意思疎通を図る取り組みがもっと推進されることを望まざらばならない。

同窓会報発刊に関わって



同窓会副会長

儀保博信

14期 文理学部社会学科

私と同窓会報との関わりは、卒業後すぐに始まった。琉球大学事務局に採用され、3年後琉球大学広報担当となり、当時は学内紛争が激しく、土木ビル事件や内ゲバ、入学式や卒業式などの取材を3年ほどしていた。

当時、琉球大学同窓会事務局は大学事務局職員が勤務時間外に数名で担当していた。

昭和63年10月12日の同窓会評議員会で、新規事業として同窓会報を発行することになり、同窓会の総務部長をしていた私と、琉球新報記者の上原修さん（社会学科卒）が中心になり、株式会社アドバイザー代表の西江弘孝さん（社会学科卒 故人）に編集を協力してもらい、昭和64年3月を目途に第1号を発行することになった。

主な編集方針としては、①3万余の卒業生が何処でどのような活躍をされているのか、②卒業生同志の情報交換に幾らかでも役立てたら、③同窓会の活動状況を載せることにより、何周年かの記念誌発行に参考になればということであった。

当時はバブル期で、また協賛企業のご厚意もあり、会報を発行し1万5千名の同窓生の各戸に発送する資金も確保することができた。

しばらくすると、西江さんから「世の中の経済状況がおかしくなっているよ。広告もお願いしにくいので?」と言われた。案の定、広告収

入が減り、平成10年からは年2回発行から年1回発行となった。

できるだけ、卒業生の活躍状況が見えるようにするため、人物コーナー、企業訪問、インタビューコーナーを設け、これまで県内企業や市役所など約30箇所及び個人約100名を訪問し、そのほとんどは上原修さんが担当した。

これまでで1番ショックだったのは、「寄稿」された方の原稿を「投稿」欄に掲載してしまいお叱りを受けた事である。「校正恐るべし」である。

これまで30年ほど関わってきたが、同窓生も現在7万8千余名になり、国内外で活躍されている。

キャンパスも首里（約3万坪）から千原地区（約34万坪）・上原地区（約4万坪）に移転した。

印刷方法も、タイプライターからワープロそしてパソコンへと移り変わり、同窓会ホームページでも会報誌を見れるようになっており、編集、印刷、発行、発送など会報誌発行の見直しを検討する時期に来ているのではないかと。

ご多忙中にもかかわらず、無理なお願いに対応していただいた寄稿者の皆様、また、これまで色々ご協力をいただいた歴代の事務局長、編集委員、協賛企業等の皆様に厚く感謝申し上げます。

記念誌発刊に寄せて



同窓会評議員

福里重盛

14期 文理学部化学科

私が同窓会活動に携わったのは、副会長としての4年間を含むおよそ10年間である。その間、県内外の同窓会員である多くの先輩や後輩と、いろいろな機会にお会いし親しく交流することができた。仕事の上ではお会いすることの少ない教育、医学、行政、法曹等々各界の方々との出会いは、新鮮で勉強になることの連続であった。琉球大学の卒業生は、すでに7万人をこえており、それぞれの分野のリーダーとして大きく貢献されていることを知るにつけ、頼もしく感じた。

幸いにも、私は平成22年の母校開学60周年と平成27年の同窓会創立60周年の二つの記念事業に微力ながら関わり、いずれも基金造成事業としてチャリティゴルフコンペを実施するため、実行委員の一人としてお手伝いをする機会に恵まれた。平成22年には、赤嶺健治同窓会長の下で比嘉良雄実行委員長を先頭に、国際ゴルフクラブの協力を得て宮城武久事務局長が準備運営の中心となった。平成27年には、幸喜徳子同窓会長の下で安里昌利実行委員長を先頭に、琉球ゴルフ倶楽部の協力を得て山里将順事務局長が運営の中心となった。いずれのコンペも200名以上の参加を得て、多くの企業や同窓会員のうれしい寄付と商品提供を受けて、成功裡に初期の目的をほぼ達成した。

このような活動の中で感じることは、琉球大学に対する各界の期待の大きさである。同窓会

活動の目的には、「会員相互の親睦を図り、母校の発展に寄与する」とある。母校の更なる発展に寄与し期待に応える方法は何だろうか。同窓会として財政的な更なる充実強化を図り、母校に対する研究費助成や奨学制度など、仕組み作りが望まれているのではないかと思う。最近マスコミでも取り上げられる子供の貧困問題は、社会環境の変化などもあって、特に離島県である沖縄において深刻だとする調査である。同窓会としても、奨学制度などによる支援を広げ、このような問題の改善に協力を拡大する必要があるのではないか。

ところが、同窓会の財政力は十分とはいえず、仕組み作りなど容易ではない。琉球大学の卒業生は遠くない将来に10万人を超えよう。でも、会員の住所は大切な個人情報ゆえに把握が容易でなく、同窓会の財源となる会費徴収に限界がある。それ故、会員個々から徴収する会費に大きく依存した財政では、社会的な期待に応えることが困難ではないかと危惧する。

こうした現状を勘案すると、同窓会にとって独自の事業収入を検討する時代に来ているのではないかと勝手ながら考える。「独自の事業収入」を得ることは容易でない。が、多くの分野でリーダーとして活躍されている卒業生の知恵をしばれば、開学70周年、75周年に向けて、財政問題は議論をする価値のあるテーマではないだろうか。

私の学生時代



米国在住

比 嘉 照 行

15期 文理学部英語英文学科

私の琉大時代のエピソードを、1990年出版の自叙伝「名護マサー比嘉・ニューヨーク七転八倒」から引用して語ることにしよう。

私の大学時代の生活はそれこそ乱れ果てていた。浪人時代に精魂尽きる程ガムシヤラに勉強に励んだ反動ゆえか、学業に対する意欲は全く無かった。むしろ勉強以外の事に関心を抱き始めたようだ。バンド部に入り、すぐやめた。ダンスクラブに少し籍をおき、社交ダンスも習った。ツイストがはやった当時、流行のマンボズボン履き、ダンスパーティで派手に踊りまくったし、講義もその格好で出掛けた。空手道の鍛錬も学業以上に専念した。寮に入っていた頃は、それこそ反逆児だった。同室の上級生達には、何時も何かと逆らう有り様。寮の飯は相変わらず貧しく、軍隊式に一列に並び、寮婦がセットするのを次々に受け取るのだ。たまに出されるゆで卵やミカンなどは、各自で籠の中から一個ずつ取る仕組みになっていた。暴れて何時も腹をすかしていた私は、自分のすぐ前に並んでいる学生の背後から手を伸ばし、籠の中のタマゴをサッと掴みポケットに入れ、次の自分の番も真面目な顔をして、おもむろにまた一つ取る。私の皿にはいつも二、三個のタマゴやミカンが乗っかっていたのを、他の学生達は羨ましそうに横目で見やっていた…。私の手口を真似する悪友達が増え始めたお陰で、列の最後あたりに並んでいる学生達は、タマゴが不足だと

職員にさかんに文句をたらしていた。

「足りる分だけちゃんと作った筈なのに…？」とけげんそうな顔をしている寮職員達を、私は気の毒そうに(?)眺めていた。

さて、大学時代に学問を怠ったり、自分を責めたり、後悔の念に駆られたりする事はさらさらない。むしろ私は好きな空手道の研究鍛錬に没頭した事を、大変ありがたく且つ誇りに思っている。それが私の人生をも大きく塗りかえたからだ。それはまた、私自身の持って生まれた「運命」だとさえ信じている。

私がどうにか英文科を卒業したのが1967年だった。何の風の吹きまわしか、私に琉大学生課から就職の話があった。背広姿でのサラリーマン生活が、その時から始まったのだ。私の品行を知らぬ後輩や教授達には、そんな私があたかも模範先輩や優秀な卒業生と映ったことだろう。この課での任務の一つは、当時過激な学生運動が頻繁だったので、キャンパス内で何やらマイクでわめいている革マルとかの連中への警告や制止だった。云わば私は琉大の用心棒として名誉(?)にも採用されたという事を後日知った。その頃、日本政府のピースコー隊員として合格、シリア国への派遣予定が戦争勃発で中止となった。以来、外国行きの夢が私の胸の中で強烈にくすぶり続けたのだ。

「人間到る所に青山あり」で、私がNYに降り立ってから早や44年。沖縄空手道を私が修得していなかったならば、アメリカンドリームの成前は不可能だったと断言する。まさに「芸は身を助く」である。

あの頃



仲 吉 加代子

15期 文理学部英語英文学科

春爛漫、桜咲き、春風に誘われ赴いた花いっぱい
の海洋博記念公園で琉球大学同窓会の幸喜徳
子会長にお会いした。不思議な会長の説得力に押
され同窓会記念誌への寄稿を引き受けてしまった。

1963年文理学部英語英文学科に入学した私は
住所が那覇市内にも拘らず入寮を希望し女子寮
生活が始まった。入寮早々なんと歴史に残る50
日間に渡るバスストライキが始まったのである。
友人たちは、トラックの荷台に乗せてもらっ
たりして、苦労したようだ。「ストライキのこ
とを知っていて入寮したの？」何人かの友人に
問われたものだった。勿論私にそんな予知能力
があるわけではない。寮生活で印象に残った出
来事がある。ある日、離島出身でとても落ちて
いてしっかり者の大先輩が自分の部屋で白い蛇
を見たと寮中大騒ぎになったことがあった。結
局はその蛇が見つかることはなかった。悲しい
ことにその先輩のお母さまが亡くなったとの知ら
せが届いた。あの白い蛇はお母さまの化身だっ
たのかと噂したものだ。この世には科学では解
明できない不思議な世界があると実感した。

寮は一年で出た。間借り生活をしている友人
らの部屋によく集まった。国籍のない沖縄県
民、本土には米軍発行のパスポートで渡航する
という沖縄の置かれた不条理な状況など熱く論
議したものだ。本土では歌声喫茶が全盛期の頃
でその影響でロシア民謡や反戦歌を覚えウクレ
レに合わせてよく歌った。

キャンプにも出かけた。手付かずで自然が
いっぱいの比地川の岸辺にテントを張って、星
降るような夜空を眺め、流れ星もいくつも数え
る贅沢なひと時も味わった。また、安波川にも
出かけた。川の両岸には満開のつつじが咲き乱
れ、うら若き乙女たちは水面に落ちた花を拾い
集め髪飾りにしてポーズを決めた写真がある。
その後何年か経って行ってみたら安波川のつつ
じは全滅でとても悲しい思いがした。

高校時代に生嚙りのフルートを購入した。琉
大吹奏楽部に入り、宮古島で慰問したお年寄り
の前で演奏した曲の中にオールド・ブラック・
ジョーが含まれていた。歌詞がとても気になっ
て落ち着かなかったのを覚えている。

一年間の米国留学の後、高校で英語教師を定
年まで勤め、退職後に中断していたフルートを
また始めた。様々なラッキーな出会いがあり「と
ても人様の前では…」と思いつつも有り難いこ
とに時々ステージで演奏する機会に恵まれ多く
の人にお世話になった。先月模合グループで年
女のお祝いをしてくれた。年女一人一人に月桃
紙の短冊にしたためられた短歌を詩吟の調べで
吟じていただく素敵なおプレゼントがあった。私
がいただいた身に余るありがたい歌が

～聞かせてよ 妙なる調べ 折々に 響く心
の泉にしあれば～

素晴らしいもろもろの出会いに感謝！ 同窓
会60周年おめでとうございます。

琉大の思い出 ～運命の出会いと米須先生のクラス～



同窓会評議員

下里義弘

16期 農学部畜産学科

琉大に入学した時の感動は、半世紀余が経った今でも鮮やかに蘇って来る。入学と同時に学寮に入ることができたのは幸いであった。寮では、多くの素晴らしい先輩たちに恵まれた。なかでも、法曹界での活躍を目指し、いつも六法全書を開いていた竹越堅哲氏の姿は印象深く残っている。実の兄のような語り口で将来の夢を語っておられた姿が、とても眩しく感動的であった。竹越氏をはじめ寮での先輩たちとの交流は、その後の大学生生活に大きな動機づけとなり、まさに運命の出会いとなった。

さて、首里の高台にあった琉大へ、大きな夢と希望を胸に足を踏み入れたものの、学期の始まりと同時に英語Ⅰで苦戦。米須興文先生のクラスは、ネイティブと変わらない流暢な英語で全員に順次指示し応答を求めるアメリカ方式である。ABCしか知らない私にとって、クラスに出席することは死刑台に立たされているようなものであった。先生は温厚な人柄であるが、ごく当たり前のように容赦なく全員に指示し、流暢なリズムが私のところで止まるのが、いつものパターンとなった。全員の顔が私に向けられ、特に女子学生の視線には耐えられなかった。

この屈辱から抜け出し、大学を卒業するための手法はないものかと真剣に自問し、英語に対する考え方を根本的に改めることを決意。まず、中学1年から3年までの教科書を入手し、ゼロからの出直しで英語一点に集中。英語Ⅰは丸

暗記するまで予習復習を繰り返し、なんとか単位は取得できた。しかし、英語に対する恐怖心はなかなか消えることはなかった。そこで、畜産学科に在席しながら英文科の主な科目を聴講し、英語の学習を続けた。

ある日、英文科の学生たちと一緒にクバサキ・ハイスクールを訪ねた際、そこで知り合った米国人女子学生と、苦手な英語で文通を始めた。不思議な縁であるが、しばらくすると週末にはいつも彼女の自宅に招かれ、英語しか話さない両親や弟たちと家族ぐるみの交流が続いた。そのうち英語に対する恐怖心が消え、ネイティブの表情が読めてきた。また、ラジオの英語放送が、何を話しているかが概ね聞き取れ、専門分野の原書も、多少の時間をかければ読めるようになった。そして農学部を卒業と同時に、畜産学専攻で米国留学の道が開けたのが今もって信じ難く、夢の如き他人事のような思い出となっている。英語クラスで女子学生の視線に怯えていた私に、救いの手を差し出してくれた米国人ファミリーには、ただ頭が下がるばかりである。

竹越氏をはじめ先輩たちの後姿と、高い見識・寛容さを兼ね備えた恩師の方々、とりわけ、クラスで一番出来なかった学生を出来るまで教えて下さった米須先生の指導力、そして何よりも、英語教育で先進的な地位にあった琉大の学風に心から敬意を表し、感謝したい。

琉球大学に感謝して



学校法人石川学園理事長

石川 正一

16期 法文学部商学科

私は、東京オリンピックが開催された1964年、琉球大学法文学部商学科に入学した。1963年3月宜野座高校を卒業し、現役合格は「不可能」と承知していたので、一年間の浪人生活を送った。

高等学校の商業科に籍をおいていたが、恩師の勧めもあって大学を受験することにしたからである。琉球大学受験の理由は、学費が安いことと、県内なら親の援助に頼らず自力でも卒業できる自信があった。

当時の浪人生活は、現在のように予備校に通うのではなく、自主学習を主とする宅浪であった。私達は、母校の図書館を使用することができたので、5～6人が集って受験勉強に取り組んだ。

その頃は貧困な社会であったので、ほとんどが高校卒業と同時に就職した。我が家の家業は農家であったので、高校時代までの長い夏休みは農作業を手伝う貴重な人夫であった。

それにもかかわらず、大学進学ができたのは恩師のお陰であるが、一切の受験勉強もしていない私にとって琉球大学の受験は、振り返ると無茶な決断であったに違いない。

琉球大学は、米国民政府令により1950年、首里城跡に設立された沖縄の最高学府で、沖縄の人々の期待は大きく、私たち若者に夢と希望を与えた。米民政府布令で設立された大学で法的制約も多かったが、大学の自治と学問の自由を

掲げ、教官はもとより学生の一人ひとりが沖縄の復興に貢献したいとの意欲に満ちていた。

当時の沖縄の通貨は米ドルであったが、琉球大学の授業料は、前期10ドル、後期10ドルであった。就職した同級生の初任給は、約30ドルであったので、現在の国公立に比較すれば安い授業料であった。

大学には、学生寮も完備されていて、男子学生に限り間借り学生が学生寮の食堂で食事をする制度があった。1ヶ月の食事代も約10ドルであった。近くの民家に間借りすると、家賃は5ドル程度であった。

布令大学と称される大学も、1966年には琉球政府立となったが、日本本土の国立大学と比較すると規模や教授陣、教育設備や備品など決して充分ではなかったと思う。しかし、極めて安い学費で若者に最高学府の教育機会を与えていたことに心より感謝するものである。

植民地支配等とアメリカに対する批判の声も多かったが、琉球大学の創立を始め、アメリカ本国の大学や、日本本土の大学への国費留学生の派遣など、米国民政府は、沖縄住民の自立と豊かさを望む住民の期待に応えるため、少なからずも精一杯の努力がなされたものと確信する。

長い復帰運動の結果、1972年5月15日、沖縄県が誕生した。琉球大学も国立大学となり、千原キャンパスに移転した。県民が待ちに待った

医学部や各部の大学院の設置も急速に進展した。

私も学生時代から公認会計士の国家試験に挑戦し、初志貫徹で努力してきた。大学卒業後は、恩師の外間完和先生が経営する公認会計士事務所に勤務した。職業会計人が集う恩師の事務所での長い修業期間を終えた後、1975年から学校経営に転身し現在に至っている。

当時を振り返ると、県内には会計士受験用のテキストも専門書も少ないうえ、受験対策などの講座もなく、受験生は独学で奮闘した。小生が学校経営の動機となった主な理由も教育環境に恵まれない県内の状況の改善を期待したからである。

学校教育は、履修期間にどれだけの教育成果が上げられるかが問われる。専門学校は、比較的短期間で社会ニーズの高い専門職の養成ができるので、専門職業教育機関としての役割を果

たすことができる。

現在の混迷する社会の中で多くの人はただ生きることに忙しく、人生の意味を失い、精一杯生きることへの情熱さえ失いかけている。人間同士の交流や切磋琢磨によって、競争心をバネに自らが燃えて自主的に勉強する教育環境が大切である。

人間は自らの進歩向上を目指すとき、決断の機会に巡り会うものである。万事に共通することだが、幸せな人生は日々の懸命な努力によって成就するものである。

職業教育においても国際化の進展や社会ニーズの変化を見据えた戦略が求められている。人間らしく生きるために必要な知識と知恵を習得させ、自らの生活力を向上し、自立できる人間作りこそ教育であるとの信念のもとに新たな決意が燃える。

大学との連携と地域振興



同窓会宮古支部長

長濱 幸男

17期 農学部畜産学科

大学との連携強化は、同窓会員の多くが経験してきたことだと思う。私自身もいくつかの経験をしてきた。なかでも、宮古島の肉用牛の改良と宮古馬の保存、トライアスロン宮古島大会の取り組みで、母校の先生方からいただいたご協力は忘れられない思い出である。

私は本土復帰前の1969年に首里キャンパスを卒業した。専攻は農学部畜産学科で、宮古島市役所(旧平良市)に採用されて畜産係となった。

復帰前は米国民政府の影響で、肉用牛もアメリカの種牛が導入されていた。ヘレフォード種、ショートホーン種、アングス種等である。復帰後は雑種化した肉用牛を黒毛和種にまとめ、霜ぶり肉をつくるのが畜産技術員の仕事だった。私どもは、昭和47年(1972)から51年(1976)までの5年間だけでも、旧平良市で生産された2,135頭の子牛の発育を測定検査した。また、牛を登録して血統整理を行った。親牛は基礎登録、補助、基本、高等登録とランク付けをした。肉質の良い牛は発育が悪く、発育の良い牛は肉質が悪いという事情もあり、銘柄牛をつくることは容易ではなかった。

そんな中、力強い味方が母校・琉大の畜産育種学の先生方であった。新城明久教授は、私ども生産地のデータを分析するとともに、血統的に体積ラインの牛には、資質ラインの牛を計画交配することで、銘柄牛ができることを立証した。その後、30年以上にわたって先生と宮古島

の連携は続いてきた。今では、本土からきた購買者の宮古牛に対する評価は高いが、その背景には、卒業生の現地活動と母校の専門教授との連携があったからだと自負している。

県の天然記念物・宮古馬の保存も、母校の新城明久教授との連携が出発点である。1976年には14頭と絶滅の危機にあったが、今は50頭まで増えた。大学との連携による賜物だと思っている。

宮古島トライアスロン大会で私は、第1回から第4回まで実行委員会の事務局長を務めた。立ち上げの段階で経済学の阿部統教授から、このイベントは宮古島の離島性、海洋性、住民性を活用した内的開発であり、間違いなく地域振興として役立つものだと背中を押された。その後も、多くの先生方の協力を得た。私は定年退職後、数年間トライアスロン大会のアドバイザーをした。その時、工学部の仲座栄三教授と研究室の皆さんに、水泳会場となる前浜の潮流調査をボランティアで実施していただいた。安全対策の基礎データが得られたのである。

私たちの支部は会員相互の親睦、親子教室の開催とともに、母校の教授を招いて講演会も開いてきた。こうした大学との連携強化は、特に島嶼県では大事なことだと思う。各分野の会員の「連携体験」を記録に残し、後輩に継承するのも同窓会の役割ではなからうか。

二人の元少女の友情と夢の実現



米国在住

山城 米子

17期 法文学部英語英文学科

私は1965年琉大英語英文科に入学、1969年卒業、同年夏、ハワイ大学大学院に留学、1971年に修士号を取得し沖縄に帰りました。当時の学長はとても品格のある英語英文学科長も務められた安里源秀先生、卒業した時は池原貞夫学長、私がアイススケートで足を骨折、ギブスを巻き松葉杖で首里城の坂道を登っている処を学長の車に乗せて戴いたことも思い出です。

私と現琉大同窓会の幸喜徳子会長とのご縁は琉球箏曲を通して始まりました。徳子先生は琉大4年生の頃お琴教室を開設、私が1年生の時入門しました。卒業後、彼女は県立高校で教職に就きましたが、「日本航空の stewardess になるのが夢。学科は合格したが鼻中隔湾曲の為、身体検査が通らない。手術したいが親が反対で出来ないのよ。付き添いも居ないし。」と仰る。「じゃあ、私が付き添うから先生、入院して！ 夢は是非叶えなきゃ一生後悔するよ」と急ぎょ、鼻骨を削る手術。その後、日航 stewardess へ合格し上京したのです。私が琉大卒業前に東京へ彼女を訪ねると「米ちゃん、次は、アメリカで会おうよ。」と仰る。「そんなお金無いですよ。東京までの旅費だけで精一杯だったんだから。」と言ったら、「米留試験を受けなさい。そしたら、アメリカで会えるじゃない、ね！私も今は国内線だけど、英語勉強して国際線飛ぶのよ。今、タイピングのクラスも取ってるの。貴女英文科なんだから私よりずっと分がいいじゃないの、頑張って！」1ヶ月後に私は米留試験

に合格。ハワイ大学の大学院に入学し、ホッとしていると徳子先生から電話が入り「米ちゃん、私も英語の試験、合格して国際線飛んでいるのよ。今、ハワイよ。パゴダ ホテルに来て！」と約束通りハワイでの再会。夢は更に広がり、「米ちゃん、次は米本国内で会おうよ。」気の小さい私も彼女に引っ張られ段々大胆になり、「オケー、1年間平均80点以上の成績なら、米本国招待があるから頑張るね！」と1年後に米本国旅行へ。サンフランシスコのホストファミリー宅に宿泊中、徳子先生から「米ちゃん一緒に旅行しよう！」と電話が入り、サンフランシスコ境界を旅行しました。夢を実現させ「次は 沖縄で会おうね。」と約束。私は2年間で修士号を取得し帰国しました。徳子先生は日本航空で世界各国の空を乗務した後、結婚。

私は米軍基地内の陸軍図書館勤務の頃、ハワイ大学で同じ年に修士号を取得した人類学者のロバート・エドモンドソン、ハワイ初の人類学のテレビ講座を開発した人ですが、沖縄まで来てゴヤ・ホールで結婚。私はハワイ大学で15年日本語を教え、マノア日本語学校の校長を15年、それからカネオへ日本語学校を設立、15年勤め退職。現在は、お琴三味で弾き語りCD作成に専念しています。

私と徳子先生とは何かコメディミみたいな夢の追っかけ合いの2人の元少女の話ですが、これからも果てしなく私達の夢は続くのです。Aloha, Yoneko Yamashiro Edmondson (ハワイ在住)

我が青春の琉球大学



同窓会評議員

中村 一 男

18期 理工学部数学科

1 入学までの紆余曲折

1965年3月に知念高校を卒業し、4月には琉球大学法文学部経済学科入学。しかし、前期終了の9月末に退学。外国航路の航海士になる夢にチャレンジするため、国費留学の「航海」を受験することにした。12月上旬に国費の1次試験を受け、万一に備えて琉大の数学科にも出願した。数学科にしたのは、前期在学中にたまたま教室を間違えて受講した数学の内容に興味を引かれたからという単純な理由による。

さて、1月10、11日に琉大を受験。国費の1次は合格し、1月23日に2次の面接。その結果、国費は落ち琉大には合格したので、数学科に入学することになった。

2 数学科の思い出

高校までの数学に比べて数値計算よりも論理的なつながりを探究することが多い内容は、魅力的であった。招聘教授による集中講義は理解



が難しく、レポート作成は仲間と一緒に悪戦苦闘した。経済学科在学中に20単位を修得していたので、4年次後期は週1のゼミだけ。ゼミは中里治男先生ご指導のもと、「Linear Algebra」をテーマに4人で和やかに進めることができた。数学科4年次の忘年会を終え、連れだって那覇の街から首里まで歩いて帰る道すがら、龍潭に差し掛かった所で、誰かが「泳ごう!」と言い出した。師走の寒風吹きすさぶ中、程なくして3名が龍潭で泳ぎだしたのは、若さのなせることだったか?……。

さて、1970年3月に琉大を卒業し、すぐ教職に就いた。那覇高校を皮切りに母校の知念高校で定年を迎えるまで37年間の教職生活を過ごした。我が進路は紆余曲折を経て、ひょんなことから「数学」を専攻することになったが、いま振り返ると「数学」を専攻し教職に就いて良かったと思う。多くの同僚や教え子に巡り会えたのもありがたい。

3 サークル活動

入学してすぐバスケットボール部に入ったものの、体育科以外は私とあとひとりだけ。体育専門の彼らについて行けず、ふたりはいつも女子の練習相手。それでも、私にとってはしんどかった。それまで抱いていた「女は弱し」という先入観は、すっかり吹っ飛んでしまった。翌朝、男子寮からキャンパスに向かう図書館脇の急階段を上るのは大層きつかった。……というわけで、4か月ほどであえなく落ちこぼれてし

まった次第。次は、ふる里^{おう}奥武島の風俗習慣を記録にとどめたいとの思いで民俗研究クラブに入った。最初のフィールドワークは久高島のイザイホーで、島の人々が行事にかける熱き思いに感動を覚えた。沖縄本島をはじめ、久米島、粟国島、西表島、宮城島、宮古島などで計13回の民俗調査に参加。公民館や民家に宿泊して聞き取り調査をした。西表島^{そない}祖納では、村人と刺し網漁に同行する機会もあった。久志村^{ていま}字汀間の調査では、ハーミヌホーガイのオモロ^{そら}を^{ニーガン}諳んじている根神の松田カマドさんから採録できた際には大感激。オモロは、解釈も含め『南島歌謡大成』（角川書店刊）に引用されている。お世話になった方々や寝食を共にした仲間とのふれあいは、心和む青春の思い出である。

4 アルバイト

親からの仕送りだけを当てにはできない身にとって、アルバイトは頼みの綱だ。友人の^{つて}伝手で首里高生の家庭教師をすることができた。バイト代は2時間ずつの週3日で月25\$（2食付きの下宿代が16\$）、台湾旅行の際には餞別、年末にはボーナスまでいただき、当時としては恵まれていた。休日には、那覇港で荷役作業のチェッカー（検数員）や交差点での交通量調査などもやった。時給が一番高かったのは那覇港での袋詰めセメントの荷積み作業。また、某ビール会社主催「○○○ビール夕べ」と銘打ったパーティーの会場作成・接待のバイトは、終えた後の楽しみがあった。

5 琉大祭

琉大祭で、民俗研究クラブはフィールドワークの成果を発表。徹夜で準備に追われた。「ユタ」や「魂込め^{マフヤグミ}」をテーマにしたこともある。前夜祭のパレードでは、嘉手納基地からベトナム戦争に出撃していたB52爆撃機への批判を込

めて、「B52の葬式」をテーマに設定。B52の^{しろいはい}白位牌や^{がん}龕を仕立てて街を練り歩き、反戦平和を訴えた。（1968年12月6日）



B52の白位牌



B52の葬式

6 祖国復帰運動・学生運動

当時の沖縄は、琉球列島米国民政府の統治下。本土に行くにもパスポートが必要だし、通貨は米ドルであった。それに、米軍や米兵による事故や犯罪が多発し、日本政府による施政権を求めて祖国復帰運動や学生運動が活発。与儀公園では頻繁に決起大会が開かれ、多くの琉大生が参加。与儀公園からひめゆり通り・国際通りを経て琉球政府前までシュプレヒコールしながらのデモ行進は恒例であった。教公二法阻止闘争の立法院包囲行動に参加したこともある。1967年2月1日午前4時ごろ、バスの始発には早いので友人たちと共に肌寒い中を首里から立法院まで歩き、包囲陣に加わって警官隊と対峙したのも「今は昔の話」である。

7 雑感

現在と比べたら、キャンパスはかなり手狭であった。しかし、そのおかげで他学科の学生や先輩後輩とも顔を合わせるチャンスが多いという利点があった。当時は、女子寮・那覇看護学校・キリ短との交歓会、サークルや学科主催のダンスパーティーも盛んであった。琉大で過ごした4年間は、我が人生に大きな影響を与えた貴重な青春時代であった。感謝！ 琉大の更なる発展を！

琉大逍遙歌秘話



当山法律事務所 弁護士

当山 尚幸

法文学部法政学科

(学生番号 66169)

私は、1966年に入学し、1971年に卒業した。その5年間、そして、今なお琉大逍遙歌を愛唱している。同期入学のメンバーが集うとき、同窓会するとき、そして沖縄寮歌・大学の歌祭のとき歌い継がれてきた魅力的歌詩の誕生秘話に迫ってみた。

作詩をした新川豊氏は、昭和4年11月23日生れの87歳の弁護士で、今なお那覇市久茂地に法律事務所を構え、かくしゃくとしている。平成28年2月2日、同氏を訪ねたところ、琉大逍遙歌誕生秘話を聞くことができた。

同氏は、琉大2期生だが、実は1期生も2期生も入学は同じ年らしい。1期生は外語学校、文政学校卒業をもって一年の単位を取得したものと認め、2年から編入した扱いを受け、3か年で琉大を卒業したため、2期生より1年早く卒業できたとのことである。

同氏が2年生の時の大学祭において、学生会が琉大逍遙歌の歌詞を募集した。全国の大学には、寮歌や逍遙歌があるので琉大にもあるべきであるという理由であった。そこで同氏も応募し、十数点の中から、文学部の仲村龍人教授が選考したものが、現在の琉大逍遙歌となった。作詩の裏話を聞いてみた。

同氏は、当時の寮（戦前の沖縄師範学校跡、現在の県立芸大敷地）の砲弾等で倒れた門柱に腰かけ、首里城跡に建つ木造瓦葺きの大学校舎を見上げたとき、大学に対するイメージが映像

のように湧いてきて、それを詩歌として表わしたものがこの素晴らしい琉大逍遙歌となった。

同氏は、イメージを詩にする際、世俗的なものと高踏的なものと対置させたり、昇華させたりしつつ仕上げたとのことである。

1番目の歌詩は、まさに高邁な学究の理想に燃えて、琉球の歴史の象徴たる首里の古城に來立つ、青年らの心意気を表現している。単にそのあたりを散策している映像を表わしているのではない。

2番は、単に世俗的に友と酒を酌み交す様を表わしているものではない。集い來た友人と友情を育みながら、南十字（南に存在する琉球大学を指す）で学問に励み、語り合う内に星の光のように科学的真理探究の気概が沸々と湧いてくることを表わしている。

3番は、栄町で色恋沙汰にうつつを抜かすのではなく、我々琉大に集う若人は純粹に学問に励もう、そうすれば太陽の冠を頂く鷲が東の空が明るくなる頃飛び立っていくように、我々も生きる原動力を得て広い世界へ羽撃いていけるであろうことを表現している。

当時の若者は、高等な学問を修めたくて真に自らの意思で琉大に集ったらしい。かような素敵な歌を作ってくださった新川豊氏には、改めて深甚なる敬意を表したい。

琉大逍遙歌

新川 豊 作詩
渡久地 政一 作曲

一 ふるき都に さすらいて

世紀のあとを 尋ぬれば

ああ青春の 血はさえて

羽ばたく希望^{のぞみ}力あり

二 友の情に 酔いふして

南十字と 語らえば

降る星影に 悠久の

真理^{まこと}の光 萌^{めぐ}むなり

三 われら若人 純情に

巷の恋は うそぶけど

見よ東雲^{しののめ}に 翔^かりゆく

巨^{あした}の生命^{いのち} 息吹あり



作詞した
新川 豊氏



首里の杜 (千原キャンパス内)



龍潭から望む首里キャンパス (1960年代)

医療再生プロジェクトに携わって



医療再生コーディネーター

宮城重哲

24期 法文学部法政学科

私は1972年、沖縄県が本土復帰し、琉球大学が国立大学になった年に入学した。とにかく学費が安かった記憶があり、今、振り返ると隔世の感がある。

卒業後沖縄都ホテルに入社し、入社直後にサンフランシスコ都ホテルに転属願いを出したが断られた。以後、英語をブラッシュアップしながらチャンスを待った。結果、全日空ホテルズに転職することにより海外勤務の夢を実現することが出来た。同社では香港営業所長としてアジアオセアニア地区をメインに10数か国での海外営業に腕を振るった。34歳から41歳までの懐かしい青春の1ページである。ホテル業界20年勤務を機にサラリーマン生活にピリオドを打ち、第二の夢であった独立を実現した。アロマ関連事業からIT事業、健康関連事業と多くの分野に携わったが、友人の勧めでビジネスマッチングをスタートしたのが大きな事業展開へのきっかけとなった。そして今回、沖縄県の再生医療プロジェクトにロート製薬側の再生医療コーディネーターとして参画するというチャンスが訪れた。

私が同窓会と関わるようになったのは関東支部総会がきっかけで、かれこれ10数年以上にもなる。関東支部の事務局長として大役もこなしたが、個人的にも大きな財産を得た気がする。その最も大きな点は、素晴らしい方々との出会いである。特に、会報誌の作成のために様々な

業界で活躍する多くの同窓生に行ったインタビューは、胸弾ませ心躍る出来事であった。海洋学科からサラリーマン、その後医師から作家と活躍している太田靖之氏、琉球舞踊や三味線で四千人以上の会員を持ち国内海外で活躍するクイチャパラダイス主宰者仲本光正氏、国会議員として活躍した瑞慶覧長敏氏、立ち上げた企業を上場させた同窓の稼ぎ頭加藤和裕氏、関東沖縄経営協の会長(現名誉会長)の重田辰弥氏、『芭蕉誌』に毎号海外からの紀行文を寄越して頂いた中島政彦氏、健康長寿問題で頑張る栗盛須雅子さん、東大教授に就任した上床美也氏、外資大手製薬メーカー勤務の知名定則氏など、枚挙にいとまがない。

ところで、再生医療は最近とみにメディアで取り上げられるようになり、医療関係者のみならず多くの方々に興味を持たれているようである。先日、琉大医学部との打ち合わせの際、関係者が語った言葉が今も鮮明に記憶に残っている。曰く、「過去のノーベル賞級の発明や発見は20～30年後に世界的な産業となったものが多い。iPS細胞はこれまでの医療業界の常識を変えるものである」。このお蔭で、何十年振りに薬事法まで改正となり、再生医療はアベノミクスとして国家戦略で動き始めた。

沖縄県は長寿県復活や医療費削減、東南アジアへの物流拠点としての観点から「再生医療プロジェクト」を推進することになり、ロート製

薬は子会社（琉球ステムセル社）を立ち上げそのサポートを始めた。そして琉大医学部の敷地内に「ロート再生医療研究センター」（写真参照）を建設し、再生医療の研究開発の拠点としている。さらに、琉大医学部はこの再生医療プロジェクトを展開するために「再生医学講座」を開設した。この再生医療プロジェクトは、沖縄県に最先端医療技術を取り入れた新しい医療産業を創出すると共に、母校の琉球大学医学部が国内のみならず世界に向かって誇れる医療イ

ノベーションを期待させるものである。

同窓会として産学官の事業をサポートしたいと言いつけてきたが、自らこのようなプロジェクトに携わろうとは夢にも思っていなかった。しかしこれも何かの縁であろう。思い切って33年ぶりに故郷沖縄に拠点を移し、再生医療コーディネーターとして本格的に活動することにした。幸いなことにこれまでの同窓会活動がこのプロジェクトで大いに役立っている。



ロート再生医療研究センター

琉球大学の思い出



大同火災海上保険株式会社代表取締役社長

上 間 優

27期 法文学部経済学科（経営学専攻）

琉球大学同窓会は2014年に創立60周年を迎えましたが、私は今年還暦を迎えます。人生の節目を迎え、光陰矢の如し、月日の流れの早さを改めて感じる次第です。

琉球大学に入学したのは、1975年、本土復帰から4年目の年であり、沖縄海洋博覧会の開催された年でもありましたが、社会全般が復帰の混乱からまだ抜け出せない時代でした。

私たちはポスト団塊の世代で、学生運動が盛んな時代の反動で、社会や大学が少し落ち着き、静かになった時代であり、「しらけ世代」、「三無主義世代」とも言われていたのを覚えています。

琉球大学は、1950年に首里城跡地に創立され、その後1984年に西原キャンパスに移転完了となりましたが、私は最後の首里琉大キャンパス組となります。現在の首里城には、当時の大学の面影はなく、一抹の寂しさを感じます。

私は法文学部経済学科経営学を専攻し、指導教官は島村潤一先生、ゼミは仲宗根啓介先生で、大学で学んだ知識が様々な意味で基盤となっています。また、私の学科では、外国語の単位取得が厳しく、特に第二外国語（フランス語）には苦戦しました。その時のフランス語の先生は、森田孟進先生（元琉球大学長）で、思い返すと必死に勉強した時期でもあり、今からでももう一度チャレンジしたい気持ちであります。

大学時代の一番の思い出は、琉大の友人5名で秘境の地・西表島を横断したことです。横断

ルートは、カンピレーの滝の近くに一泊し、半日をかけて西表島で一番高い古見岳の側をとって下山するルート。深い闇の山中で一泊し、早朝、元気よくスタートしたものの、西表島の山の中は空が見えないくらいうっ蒼としたジャングルで、私たちの計画は甘く、途中で道に迷い、山の中を彷徨い歩きました。食糧もなく、蛭には噛まれ、体力は消耗していくばかりで、日没寸前にやっとの思いで古見部落にたどり着きました。遭難は免れたものの、西表島の大きさ、山の深さは、想像をはるかに超えるものであり、今では良き思い出となっています。

琉球大学同窓会は創立60周年の節目を越え、更なる飛躍・発展に向けスタートしています。私たちが学部・学科には商学経営学友会があり、毎年総会を開催しています。琉大OBで学部・学科の同窓会があるのは数少ないものと聞いており、琉球大学全体の同窓会の発展のためにもその他の学部・学科でも積極的に取り組む必要があるかと思っています。

昨年、商学経営学友会は石嶺伝一郎氏（沖縄電力会長）を新会長とする新体制がスタートしました。会員を増やすためには「副会長職を増やす」との会長の意向があり、副会長が3名から6名に増え、私もその一人に選任されました。同窓会では当時の様々な思い出話に花を咲かせることも楽しみですが、年代を超えた人脈形成は大変有意義であり、多くの人の参加を呼び掛け、同窓会を活性化していきたいと考えています。

記念誌発刊に寄せて



沖縄銀行証券国際部上席調査役

上 地 環

40期 法文学部文学科（英文科専攻）

琉球大学同窓会60周年を心よりお祝い申し上げます。

私は昭和63年4月に琉球大学法文学部文学科英文科専攻に入学し、貴重な4年間を千原キャンパスで過ごしました。当時の指導教官である吉村清先生、伊藤文雄先生の熱心な指導を受け、また友人にも恵まれ充実した学生生活を送ることができました。

特に思い出深いのが、大学2年生の時に学年全員で取り組んだ英語劇“*Hello Out There*”への参加です。英語の発音やセリフ回しに悪戦苦闘しつつ、友人らと毎日遅くまで練習を重ねたことは良い思い出とともに大きな自信となりました。卒業後は株式会社沖縄銀行へ入行し現在に至っています。

母校である琉球大学の変革は目覚ましく、平成16年4月1日に国立大学法人に移行、より地域性及び独自性の高い大学を目指し大きく舵を取りました。また法科大学院の設置、観光産業科学部の開設など、県内経済産業界をけん引し、多くの人財を輩出してきました。このようななか安倍内閣により「女性活躍推進」「地方創生」が重要政策として打ち出され、7万人余りの卒業生を有する琉球大学同窓会のネットワークの重要性は高まっています。

平成27年8月「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」（女性活躍推進法）が参議院本会議で可決され、成立しました。男女雇

用均等法成立から30年を経て、具体的な企業の行動指針が明示されたより踏み込んだ内容となり、女性の雇用管理環境は新たなステージへとステップアップしました。少子・高齢化の影響を受け、今後日本における労働力人口の減少は避けられない中、性別や国籍を問わず資質の高い人材確保をすることは、人材の供給側となる大学側、その受け皿となる企業の双方にとって競争力を高めるためにも最重要課題であるといえます。

若年者人口が減少するなか、琉球大学においても中国、台湾や香港などアジア諸国から近いという沖縄の地理的優位性を生かした独自のカリキュラムや取り組みを展開しておりますが、県内外のみならずアジア諸国からも優秀な学生を確保するために、今後も産・学・官が一体となり継続的な施策やプロジェクトを遂行していく必要があります。

沖縄県経済の持続的発展のためには、地域経済活性化の原動力となる「女性活躍の推進」「地域創生」をいかに推進していくかが鍵となります。琉球大学同窓会設立60周年という節目の年を迎えるにあたり、本学卒業生の人的ネットワークの中心である「琉球大学同窓会」が果たす役割は今後ますます大きくなると思います。

最後になりましたが、琉球大学同窓会60周年記念事業に尽力された関係者の方々へお礼を申し上げますとともに、母校である琉球大学そして琉球大学同窓会の今後のますますの発展を祈念いたします。

志喜屋孝信先生生誕130年に寄せて



同窓会評議員

前泊 美紀

44期 法文学部法政学科

琉球大学同窓会創立60周年を迎えた2014（平成26）年は、琉球大学初代学長である志喜屋孝信先生の生誕130年にあたります。教育に情熱を注ぎ、戦後は沖縄民政府初代知事として沖縄の復興再建に尽力した志喜屋先生のお人柄や琉球大学への思い等について、志喜屋先生の孫にあたる元沖縄県議会事務局長の嘉陽安昭さんに話を聞きました。

前泊 志喜屋孝信先生の孫にあたる嘉陽さんの思い出はいかがですか。

嘉陽 家族では「志喜屋のおじいちゃん」と呼んでいます。私が2歳のときに志喜屋孝信は亡くなったので実際の記憶はないのですが、私が生まれたとき病に伏せていたのに私に会おうとして壁伝いに歩き、家族が驚いたと母から聞きました。

前泊 志喜屋先生はどのようなお人柄だったのでしょうか。

嘉陽 母からは怒ったことがなくとても優しくかったと、父からは深い教養と礼儀正しい方と。志喜屋の残した文章を読みますと、お会いした方には「様」と敬称を用い、中国の古典、琉球の歴史への造詣の深さに驚かされます。

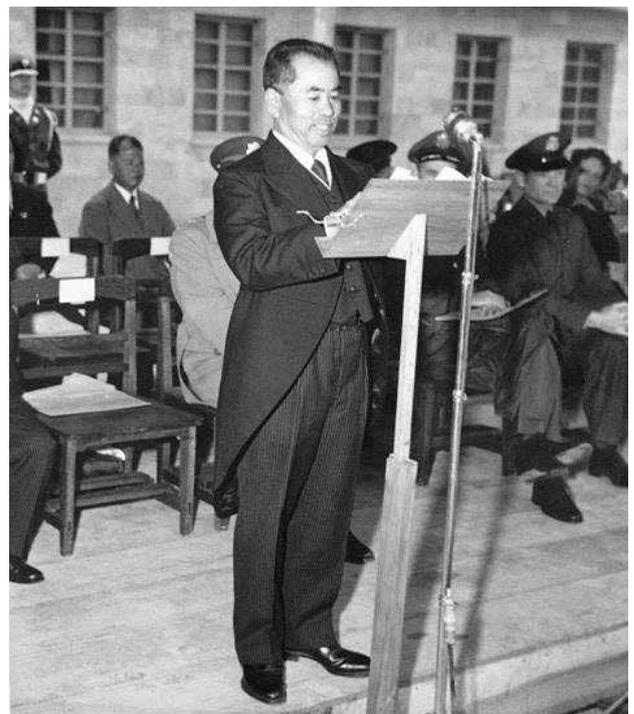
前泊 志喜屋先生の琉球大学への思いはいかがだったのでしょうか。

嘉陽 志喜屋は戦前、県立第二中学校（現在の那覇高校）の校長、その後開南中学校を創設す

るなど教育者の道を歩み、戦後「沖縄に志喜屋あり」と諮詢会委員長、そして沖縄民政府の初代知事を努めました。その生涯を貫いているのは教育者としての高い理想です。琉球大学開学にあたり初代学長に任命された喜びはいかばかりだったかと思わずにはられません。

前泊 琉球大学への思いをもう少し詳しくお聞きできますでしょうか。

嘉陽 志喜屋が残した日記や父の著書「沖縄民政府 一つの時代の軌跡」から、志喜屋は沖縄への高等教育機関（旧制高等学校など）の設置を強く要望しています。県立の二中校長を辞



琉球大学開学式で式辞を述べる志喜屋孝信初代学長



嘉陽安昭氏（左）と筆者

め、私立の開南中学校を興したのも志喜屋の理想とする「教育の機会均等」への深い思いがあったことでしょうし、最高学府としての琉球大学の開設は志喜屋の理想の実現だったことでしょう。

前泊 大学図書館は志喜屋記念図書館と命名さ

れましたよね。

嘉陽 そうです。両親とともに琉大の千原キャンパスを訪れ、時の東江学長や国府田図書館長から「首里キャンパスから名称を継承して志喜屋記念図書館とする」とのお話を聞くことができたのは家族の喜びでした。

前泊 時代を超えて志喜屋先生が琉球大学で学ぶ学生達に伝えたかったことは何だと思いますか。

嘉陽 琉球大学開学式典のあいさつ文は、志喜屋が自ら推敲を重ね「若き学徒の琉大設立に見る光明と希望こそは琉球将来の光明と希望に外ならない」と述べています。大学で学ぶ若者達への熱い信頼と期待に外なりません。志喜屋は「沖縄の未来を若者に託している」と伝えたかったのです。

「島々清^{かい}しゃ」大学



ボーダーインク 編集者

喜納 えりか

46期 法文学部人文学科地域・社会科学コース

----- 大学生活では、印象に残っている言葉がいくつかあります。『琉球大学は英語で言うと「University of the RYUKYUS」。なぜ「リュウキュウ」ではなく複数形の「S」なのか。琉球は、たくさんの島々から成っているからです』

そう英語の先生が教えてくれた通り、琉球大学では琉球文化圏に根ざしたあまたの研究が行われているのは周知の通りです。

大学では、さまざまな土地の人と会うことになりました。ゼミ教授は北海道のご出身で、スペイン語の講師はペルー沖繩移民3世でした。県外からの友人もたくさんでき、私と同じ沖繩本島でも糸満や豊見城、名護や読谷の人もいて、それぞれの地元の話はいつまでも尽きませんでした。

女子寮の混住棟にもよく出入りしたのですが、宮古や東京出身者、タイやマレーシアからの留学生とともに暮らしており、故郷の美しい景色や家族のことをたくさん聞きました。

こんな講義も印象的でした。教養課程でのことです。自分たちの暮らす沖繩について自由なテーマで調べて発表するという講義でしたが、シラバスには、1989年に発行された『おきなわキーワードコラムブック』にならってレポートする、とありました。沖繩の若者たちがポップに同時代を描いて大ヒットした本です。

タコライス、マブイグミ、^{うみんちゅ}海人、沖繩の保育園の名前……数々のキーワードで受講生らがレ

ポートを書き、私も「ウチナンチュについて」という発表を行いました。恥ずかしいほど拙いものでしたが、自分たちの生きる沖繩を手探りでつかまえたいという意識がそこにはあったと思います。南の島の大学で、私は世界のひろがり、自分の足元の「沖繩」を知ったのです。

たくさんの学生レポートは、のちに一冊の本『新琉球—現代おきなわ若者教養講座』としてまとめられました。偶然ではありますが、その本を発行した地元出版社のボーダーインクに編集者として働くことになったのですから、人生はわからないものです。

私には小学生になる娘がいます。最近、英語に興味を持ち始めた彼女が、この会社名を思いつきで訳しはじめました。ボーダーは、^{しましま}縞々。インクは、会社。だから、ボーダーインクは、「しましま かいしゃ」だね。

思わず、あっと声を挙げました。沖繩には「島々^{かい}清しゃ」という言葉があります。島とは、Islandというだけではなく、シマ=地域という意味もあって、それぞれの地が、ゆるやかに風土的につながっていく美しさが込められた言葉だと思っています。

「琉球の島々」を冠する大学で学んだこと。それが、沖繩の本を作って生きる私の根っこにあるのだと思います。60周年余を迎えた琉球大学が、これからも「島々清しゃ」大学であることを祈念いたします。

